

雲南省の国境地帯（ミャンマー、ラオス）（1）

2011.12.23

香港 花木

我が国の26倍の面積を持つ大陸国家中国は、14の国と総延長2万2千kmに及ぶ陸路国境有している。そのうち雲南省ではインドシナ半島のミャンマー、ラオス、ベトナムの3カ国と総延長4千kmを超える距離の国境を接しており、中国とこれらの国々との交易の重要な拠点になっている。

歴史的に見れば、雲南省はむしろインドシナ半島諸国の一員であった。唐の時代には「南詔」、宋の時代には「大理」、元の時代には「梁」として、大陸国家中国の影響を大きく受けつつも独立国家の体裁を取ってきた。しかし1390年に明の開祖洪武帝がこれを併合し、大規模な移民を行い「漢化」を進めたのである。

地理的にも雲南省は四川省との間に標高5000mにも達する「雲嶺山脈」を介しており、陸路での交通ルートは1966年までベトナムに抜ける鉄道（昆河鉄道）しかなかった。これに象徴されるように、雲南省の出口は歴史的に「東」でなく「南」に向いており、仏領インドシナや英領ビルマを経由して西洋文明がいち早く届いていたのである。フランスやイギリスといった列強の活動に対して雲南省の知識階層は敏感に反応し、辛亥革命においても重要な役割を果たしたとされる。¹

現在、「東」にある中国沿海部から見れば雲南省はどん詰まりの奥地に見えるだろう。雲南省の地域総生産は7,220億元（1,061億ドル）で中国では24位にすぎないが、インドシナ半島諸国家との比較ではタイ（3,188億ドル）、マレーシア（2,378億ドル）に次ぐ規模で、ベトナム（971億ドル）、ミャンマー（436億ドル）、カンボジア（116億ドル）を上回っている。また、省都昆明市は人口700万人とバンコクに匹敵する規模であり、インドシナ半島の各都市に向け多数の国際便が発着している。中国政府もこうした点から昆明空港を北京、上海、広州に次ぐ国内第4の空港として位置付けており、成田空港の2倍以上の規模を持つ大規模な空港整備を進めている。間もなく開業する予定の新空港のターミナルビルは北京空港に次ぐ第2位、全世界でも第5位の巨大な規模で、同時に市内と空港を結ぶ地下鉄も現在工事中である。



↑ 昆明市遠景。標高1900mの高地にあるとは思えないほどの大都市である。

¹ 中国「辺境」の地域経済と企業 西澤正樹による。



←若者で身動きできないほどのにぎわいを見せる昆明市の繁華街「小西門」



←銀座に相当する「正義路」ではおしゃれな店が立ち並びクリスマスイルミネーションがきらめいていた。



←市の中心部「翠湖」湖畔には、いち早く西洋文明に接した昆明らしい建築が並び、領事館も多い。

今回はミャンマー、ラオス、ベトナムのうち、雲南省西部から南部にかけて広がるミャンマーとラオスの国境地域を中心に訪問したので以下に写真を中心に現状を紹介したい。

1. ミャンマーとの国境 ～徳宏タイ族チンポー族自治州「瑞麗市」～

中国とミャンマーは雲南省で約 2000km の国境を接している。接する地域の中にはワ軍やカチン軍等必ずしもミャンマー政府の支配に完全に服しているわけではない地域も含まれる。(なお、ワは今年 10 月に将来的なミャンマーとの統合に合意したと報じられているが、カチンではまだ独立軍との小規模な戦闘行為が断続的に続いているようだった。)

この地域の玄関口は、省都昆明から西に約 600km、頻繁に発着する飛行機 (B737) で約 1 時間の距離に位置する徳宏タイ族チンポー族自治州の州都「芒市 (mangshi) 市」(旧名「潞西市」) である。仏塔をかたどった民族情緒豊かな芒市空港では、今年からビルマ第 2 の都市マンダレーとの間を結ぶ国際線も発着するようになっている。ミャンマーとの国境は、空港から国道 320 号線を更に西に向かって 2 時間半ほど行った「瑞麗市」にある。なお、この国道 320 号線は上海を起点とする国道で終点の瑞麗までは 3600km を超える距離がある。

国道 320 号線には、バイパス建設の予定があるはずだが、今回訪問した限りではバイパス工事はまだ進んでいないようであった。現状のルートは片側 1 車線で山肌を縫っていくため線形は必ずしもよくなく、低速で山道を喘ぎながら登っていく大型トラックの後ろをゆっくり走っていくしかない。ただ、バイパスの完成予定はわからないものの、数年後にこれが完成すれば 1 時間かからずに国境まで辿り着けるようになるはずである。



↑ 320 号線。

(1) 中国＝ミャンマー国境ゲート (正規編)

昆明からビルマのヤンゴンに至るルートは、古くはチベットから雲南を経由してインドに至る第二のシルクロードと呼ばれた「茶馬古道」(チベットの馬や雲南の茶を取引した)の一部として栄えていた。また最近では第二次世界大戦期間中に連合国が日本と戦う国民党を支援するために英領ビルマから雲南省経由で支援物資を輸送した「援蒋ルート」のビルマルート「滇緬公路」(当時の我が国はこのビルマルートを遮断するためにビルマに進駐し、一時はビルマ全土を支配した)としても有名である。この道はミャンマーのヤンゴン

(旧ラングーン) から物資を荷揚げしてビルマ第二の都市マンダレーを経由し、雲南省の最西部「瑞麗」近郊で中国領に入り、そこから更に 600km 東に進んで昆明に至っている。今回、ミャンマーに入国することはなかったものの、聞いた話ではミャンマー領内は道路が舗装されておらず大規模な物流ルートとしての活用にはまだまだ課題があるとのことであった。



↑ ビルマ経由でインド洋に抜けるルート図。

①中＝緬貿易のメインゲート：姐告ゲート

中国とミャンマーの国境は「瑞麗」である。「瑞麗」市は人口 10 万人を超える都市で、夜中も市がたち、漢族、ミャンマー人に加えて様々な少数民族も集まり、雲南省の最果てにあるとは思えない賑わいをみせている。1991 年、「瑞麗」市のうち国境の川を挟んでミャンマー側に食い込む形の約 10 平方キロの土地に「姐告国境貿易経済区」が設立された。川を渡って姐告地区に入ると、大通り沿いに 5 階建て程度の商業ビルが立ち並び、日用品・



食料品からバイク、電気機械、ヒスイ等を扱う店が多数軒を連ねている。

←様々な民族が入り混じりにぎやかな姐告地区のマーケット風景。

さて、この姐告地区だが、本来の国境ゲート（国門口岸）以外に近隣住民の日常出入り用のゲート（辺民口岸）、トラックが利用する貨物用のゲート（貨物口岸）の3つの国境ゲートが設置されている。メインのゲートは主に中国側からミャンマー側に抜ける観光客や、ミャンマー側から電気製品や機械等の買い付けに来るミャンマー人に利用されているようだ。ただ、中国人は一般に経済水準の低いミャンマーに対して「不衛生」、「治安が悪い」といった印象を持っているようで、観光客はそれほど多くないように見受けられた。以前は国境沿いにカジノがあり、これを目当てに多くの中国人がミャンマーに向かったというが、その後賭博にはまり資金を使い果たして監禁される中国人や、公金を横領して賭博で使い込む公務員が相次いだことからこれらは閉鎖され、より内陸に移転させられたという。その他には中国側の対ミャンマー投資は今のところごく小規模なものにとどまっているように見受けられた。



←メインの国門ゲート。門の向こうはミャンマー領である。



←地元住民用のゲート。自動車はこちらのようだ。

更に、中国とミャンマーとの間の貨物輸送専用の国境ゲートは土曜日にもかかわらず多数のミャンマーナンバーの大型トラックが中国側にやってきて貨物を積みだしている様子を見ることができた。治安や道路環境の違いから、中国のトラックがミャンマーに向かう

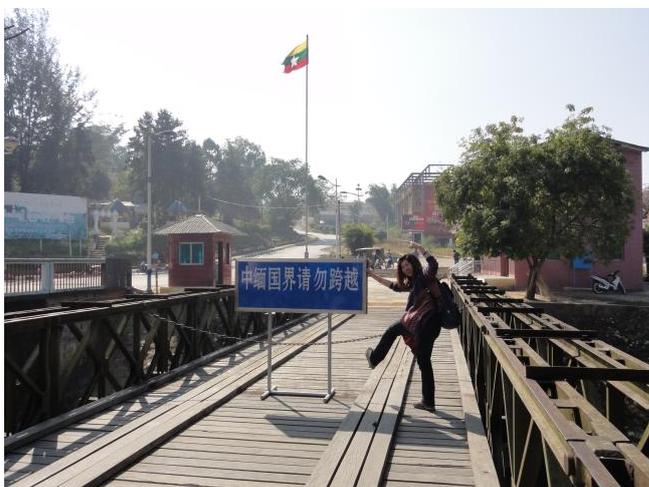
ことはないようで、トラック野郎たちは皆浅黒い顔をしたミャンマー人ばかりで、彼らがたむろする一帯の商店は、中国語の標記すらないミャンマー語オンリーの看板で、まるでリトルミャンマーの様相を呈していた。



← トラック用のゲート。トラックはなぜか日産ディーゼルが圧倒的に多かった。

②観光地化したかつてのメインゲート：畹町ゲート

正規の国境ゲートには姐告地区の3か所に加えて、姐告から東に約10kmの小さな町「畹町」にも1か所が存在する。「姐告」と「畹町」は雲南省全体で4つしかない陸路の一級口岸のうち2つである。これほど近接して一級口岸があるのは歴史的原因で、すなわちもともとは畹町が中＝緬交易のメインゲートだったからで、当初に述べた「援蒋ルート」の中国入り口はこちらだった。こうした経緯から、畹町は中国で人気の「共産党の歴史をたどる旅」紅色旅行の目的地としても人気があり、多数の中国人観光客が畹町橋のたもとにある「抗日戦争」の解説を読み、記念写真を撮影していた。



← 畹町口岸でおどけてポーズをとる中国人観光客。国境の緊張感とは程遠い。

中国とミャンマーの貿易は、ミャンマー側からヒスイや木材等をはじめとする原材料が、中国側からは電気製品やオートバイ等の機械製品が主なようである。このため貿易構造は恒常的な中国側の出超で、物流面ではどうしても中国側からの「片荷運送」となってしまう効率が悪くようだった。なお、ミャンマーでは資源を低価格で中国に売り渡すことに警戒が高まっており、特に希少なヒスイ原石についてはそのまま輸出するのではなくミャンマー国内で加工して付加価値をつけてから輸出したいと考えているようだ。ただ、ヒスイはダイヤモンドより硬度が高くその加工は困難で、ミャンマーが高度な加工技術を習得するのは簡単ではないようだ。見たところ、姐告はじめ瑞麗市内では多数の店で相変わらず低付加価値のヒスイ原石を量り売りで販売していた。



なお、ミャンマーから見れば中国製品・中国食品は安全・安心なブランド品であるようで、農器具やら家庭薬やらを売る屋台が軒を連ねており、ミャンマー人の所得を勘案して家庭薬であれば錠剤1粒から購入できるようになっていた。



(2) 中国＝ミャンマー国境ゲート（非正規編）

中国とミャンマーとの国境は 2000km に及んでおり、その全てで柵等があるわけでもなく、川や山等の自然の地形が国境の役割を果たしていることから、この地域に住む住民は日常的に両国の間を往来している状況にある。瑞麗市近郊のような比較的整備された地域でも、通行証の費用を避けるため、あるいは安全検査や税関検査を避けるために、更には

もっと単純に手続きの面倒を避けるために、多くの住民が非正規の国境ゲート？を通じて往来していた。

姐告地区内には上述のように 3 か所もの正規ゲートがあるが、更に国境地帯の何箇所かで日常的に住民が往来している場所が見受けられた。こうした場所は人が歩くにつれて自然な道ができていたり、柵に人の身体がようやく通れる程度の穴があいている場所である。往々にして中国側が立てた「柵を越えて出国することを禁ずる」という看板が、逆にそうした地点で非正規の通行行為が頻発していることを示しており、くわえたばこをしながら気軽に柵を越えて往来する住民の姿が 10 分に 1 人くらいの頻度で見受けられた。



↑ 陸路による非正規口岸の例。

こうして柵を越えてやってくるミャンマー人の多くは、見たところ柵の向かいにある電器店に向かい、中古のテレビや DVD プレーヤー、各種電気部品を物色・購入している様子であった。製品は明らかに中古だが、それでもきれいに掃除され整理することで十分商品として通用している感じであった。また電器店の隣には日本製の中古ミシンを売る店もあり、こうした小型機械がミャンマーで人気があることを伺わせた。



↑ 柵越えルートの真向かいにある電器店、ミシン店。

姐告から離れば、国境の往来は更に簡単になる。特に川は幅も狭く浅いことから簡単な越境が可能である。しかしどこでも越境していいわけではなく、一定のポイントがあるように見受けられた。おそらくそのポイントでは国境警備担当の武警と話がついている者が管理を行っており、手数料を取ることでお目こぼしをしているように見受けられた。いわば非正規なのだがまったく管理されていないというわけでもない。



↑ 畹町あたりでは徒歩での川越えも盛ん。手作りの橋をかけて通行料（1人5元）を徴収している場所もあった。



↑ 水路による非正規口岸の例。ここでは1人8元を払えば小舟でミャンマー側に渡ることができる。たくさんの荷物を抱えた人やバイクを乗せて頻繁に発着していた。

なお、こうした非正規のルートで渡ってきたミャンマー人は買い物や商売だけではなく、国境沿いの薄暗いビルを覗くと、中には多数のミャンマー人が明かりもつけずにミャンマーから持ち込んだ川ガニを手作業で仕分けしていた。ミャンマー人の賃金は中国人よりも安いいため、中国側ではこうしたミャンマー人を使いたいというインセンティブが存在する。最近広東省から広西チワン族自治州あたりでも賃金の安いベトナム人労働者流入のうわさも聞いており、中国の労働コストが上昇するにつれ、賃金の安い地域からの労働者流入圧力は否が応でも増大することになる。



↑ 天井もボロボロの薄暗い古ビル内で川ガニ (右) を仕分けする越境ミャンマー人たち。

ミャンマー側にはかつて中国人が経営するカジノがあったようだが、現状ではあまりにも地方政府職員等が通い詰めたり、負け金を支払えなくなって身柄を拘束されたりする事件が頻発したので営業できなくなっているという。噂によれば国境近くのカジノは中国の要請で全て閉鎖され、現在は国境からミャンマー側に約 20km 程度入り込んだ辺りでしか営業していないようだ。また、かつてはミャンマーから中国にヘロインを中心とする麻薬持ち込みも横行していたが、これらもここ数年でずいぶん管理が向上し、現在では相当程度減少しているようだった。ただ、前述のようにミャンマー国境付近にはワヤカチンのような半独立勢力も存在するため、その管理は言うほど簡単ではない。

(3) コーヒー産地徳宏と「徳宏后谷珈琲公司」

最後に、この地域の特色ある農業生産についても紹介しておきたい。

雲南省の中でも徳宏タイ族チンポー族自治州一帯は、熱帯にありながら標高が高く、昼夜の温度差が大きいことからコーヒー栽培に適した土地であるようだ。雲南には 100 年以上前にフランス人宣教師がコーヒーを持ち込んだと伝えられており、長らく観賞用を中心に細々と栽培されてきた。1990 年代に入り、経済の改革開放が進むと、雲南省でのコーヒー栽培も活発化していく。



↑ コーヒーの白い花 (左) と赤い実 (右)。

1994年には現在雲南省で最大手のコーヒー生産事業者である「徳宏后谷珈琲有限公司」が設立されている。同社のコーヒー農場は直営・委託を合計して15万ムーと大規模で、雲南省全体のコーヒー生産（約10万トン）の約3分の1を占めている。なお、雲南省は中国のコーヒー生産量の99%を産出しているが、これは世界全体の生産量ではわずか1%でしかない。

コーヒーは南向きの水はけのよい土地を好むということである。徳宏后谷珈琲有限公司の農園では、1ムーの土地に330本のコーヒー木を植え、植え付けてから5年程度経過した樹高2mの成木1本当たり最大で10キロのコーヒー豆が生産できるという。現在コーヒー豆相場は高騰しており、1kgで5ドルとしても1本当たり50ドルの収入となり、以前お伝えしたバナナ（1本当たり約10ドル）を大きく上回る。更に同社は合作社方式を活用して各農家（一農家当たり約30～50ムーを委託）に①土地の賃料、②作業労務費、③生産高に応じたボーナスの3通りの方法でお金を支払い、パソコンを使って投肥をはじめとする営農指導を行うとともに必要経費の無償貸付も行っているという。特にパソコンを使うことは、どのように資本を投入すればどれだけ将来の収益が上がるかを農民に対してわかりやすく説明する効果が上がっているということであった。肥料は工場で発生するコーヒーかすを活用した有機肥料を用いており、摘み取りは機械を使わず人手で行うため成熟した豆だけを収穫できる点も品質の向上に役立っているという。



←芒市空港近くにある徳宏后谷珈琲有限公司の実験農園（1,000ムー）。

徳宏后谷珈琲有限公司は、設立後2007年までの間は国際食品企業Nestleに対してもっぱら原料豆を供給してきた。しかしそれでは収入が安定せず、価格も買ったたかれがちであるため、現在はNestleへの原料豆の売却はやめ、自社ブランドでのコーヒー関係製品、具体的にはフリーズドライや粉末、コーヒー飲料を製造する方向に転向している。中国で生活された方はよくご存じのように、中国ではコーヒーはインスタントが主流であり、スーパーで売っているのは主に砂糖とミルクを混ぜた「三和一（three in one）」と呼ばれる

インスタントコーヒーで、同社の製品もこれが主力であるが、飲んでみると正直とても甘い。中国には比較的珍しい缶コーヒーも製造し自販機を通じて販売しているものの、こちらも味は昔の日本の甘ったるい缶コーヒーそのもので、コーヒー本来の味を楽しむどころではないというのが正直な印象だ。こうした印象については、今後徐々に中国のコーヒー市場の変化と歩調を合わせて変わっていかねばならない点であろう。



←同社の製品ラインアップ。

徳宏后谷珈琲有限公司の工場も案内してもらったが、コーヒー産業が少数民族をはじめとする当地農民の生活水準向上にも大きく役立っていることから、同社は政府の支持を得ているようで、工場の建設に必要な資金は輸出入銀行や国有銀行の資金が優先的に回されており、最先端の設備を導入した立派な施設であることに驚かされた。



←4.6 億元を投じて今年竣工した徳宏后谷珈琲有限公司第二工場（年産1万トン）

第12次5カ年計画においては、徳宏后谷珈琲有限公司は雲南省のコーヒー関連産業を代表する企業として更なる作付面積の拡大とシェア拡大を求められているようであった。雲南省のはずれ徳宏という土地にありながら国際的なビジネスを展開する同社は多くの地元人材を吸収しており、案内してくれた王さんも数年前までは地元の小学校の校長先生をし

ておりコーヒービジネスとは全く縁がなかったという。また王さんの部下の女性も非常に流暢な英語をしゃべり、この地域を訪問する国際食品企業の案内役を務めているということで、現代でも雲南は辺境の辺境でありながら同時に世界と密接につながっているのであった。

→徳宏后谷珈琲有限公司の王さんとコーヒー農園の前で。



なお、加工に回す以外のコーヒー豆は主に輸出され、輸出先で他の産地の豆とブレンドして供されることが多いため純粋な雲南コーヒーを海外で味わうことは現状ではなかなか困難なようである。ちなみに日本の UCC もここから豆を仕入れているということであった。輸出に当たっては、やはり前半で述べたようなミャンマールートは現状では使用しておらず、トラックではるか深圳まで運んでいるそうである。ただ、来年には一部の豆をミャンマールートで輸出する試みを計画しているとのこと。この辺りはビジネスだけでなく、雲南省の政策とも密接に関係がありそうだ。

ちなみに、日本でも有名な実業家の邱永漢氏は、数年前に雲南のコーヒーに目を付け、既に当地で農園を開設し、中国風の甘いコーヒーでない本格派のレギュラーコーヒーの販売と高級喫茶店の経営に乗り出している。昆明で一番の高級ホテル「翠湖賓館」ロビーには同氏が運営する q's coffee があり、雲南オリジナルのコーヒー豆も一袋 120 元という高価格で販売していた。雲南コーヒーは世界舞台にデビューしてから日が浅いが、ハワイのコナコーヒーやインドネシアのトラジャコーヒーのようにブランド価値が認められてもてはやされる日も遠くないかもしれないと思われた。



←高級感あふれる q's coffee 店舗。(昆明市)

(以上)

Disclaimer: 本資料中の数字は注意してチェックしていますが正確さを保証するものではありません。
文章中意見にかかる部分は個人的見解でありいかなる組織の意見でもありません。